

ます。

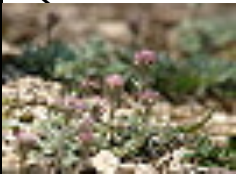
題材法話

※前号からのつづき

法然上人は、「ひたすら仏の名を称えなさい。そうすれば必ずお浄土に往生できます。なぜならそれが阿弥陀様の本願のだから」と、返られました。この念仏往生の教えは、濁世に苦しむ人々の灯火となりまし。ところが当時の仏教界では大問題だったのです。なぜならあつた僧侶は、当時の主流であつた僧侶のため、出家仏教が否定されることになったからで、「立正安国論」のなかで、「法然といふものあり、選択集を作。あまねく十方の衆生を迷わす」といつてはげしく批判していただきます。みない方に、「日本国見えけり。この五十一年が間、一天四海一人もなく」と、その影



響力も認めざるを得なかつたのです。そこで叡山や南都（奈良）の僧徒が、一斉に法然の「承元の法難」を訴えられた。激しく念仏停止をう念仏停止を発令し、法然上人を始め、主だったものを死罪・流罪に決定しました。法然は四国に配流となり、越後に流罪となり、親鸞聖人が「承元の法難」と呼ばれるものでした。法然上人は屈することなく、「流罪である。私にとつて幸せである。かゝるから辺鄙な地方に赴いて、様々な人達に念仏をすすめてたいと考へていたけれど、機会が無く残念に思つていた。それが実現できると仰つたそうです。」



二十九歳の時に挫折の中で比叡山を下りて六角堂に百日間参籠され、聖徳太子から法然上人の話を聞くように夢の中で勧められ、百日に休むことなく法然上人の元へ通ひ続けて教えを受けられ、念仏の道に入られ、師親鸞聖人は和讃で、「本詠むなしくすぎなまし」と詠われ、偏依善導」と仰られた。同じように、親鸞聖人にとつても法然上人は、計り知れませんが、傾倒の深さは法然上人が、入門して日の浅い親鸞に「選択本願念仏集」を書写することをお二人の深い深い絆を感じました。



間違いなく本願を疑うから速やかにさとりの世に入ることとは、必ず信じるのです。念仏往生の教えは、自力の道を捨て去り、信心一つで悟りを得ることができるとあり、それを疑うことからは迷いの世界に止まるのだと説きます。ここが聖道門と浄土門との大きな違いであり、重要なところであり、悩めるか私たちが、煩悩があるから生きられるともいえません。つまり食べること、眠ること、人を愛し子供を育てることもすべて煩悩なのです。門の道しかないのであれば、私たちの救いは永遠に閉ざされることとなります。だからこそ、如来の慈悲が本願の念仏となつて、私たちを働かすは如来にすべてを任せ、私一人のみが救いを疑うわけの唯一の障りである。と詠